８　葬式

社会人となって年輪を重ねると付き合いも広がるが、それに従って葬式への参列も多くなる。故人との付き合いの濃淡によって参列の仕方が異なるが、一般的には次のような振る舞いをする。

葬儀・告別式の前日夜に行われる「通夜」は、不安定な死者の霊を見守り、かつ、邪霊の接近を防ぐ儀式である。したがって、近親者が徹夜で見守ることを基本とし、故人と深い関わりがあった知人・友人が行くものである。近年では、仕事の都合で葬儀・告別式に参列できない人が通夜にお参りする場合も多い。

通夜には、平服あるいはダークスーツで参列する。「この度はご愁傷様でございます」や「心からお悔やみ申し上げます」とお悔やみの言葉を遺族にかけ焼香する。「返す返す」「重ね重ね」といった繰返しの言葉や、「浮かばれない」「迷う」といった忌み言葉は慎む。

遺族の謝意の現われである“通夜ぶるまい”に誘われたら、少しでもいただくのが礼儀。故人と関係のない話をしたり、大きな声は出さないように注意する。長居は禁物で、帰る際には喪主や遺族に挨拶してもう一度焼香する。

葬儀とは遺族・親族・親しい友人知人が参列する儀式であり、告別式とは一般の人が参列する儀式である。今日では葬儀と告別式が引き続き行われるから、故人との付き合いの濃淡によって参列する時間を調整するとよい。

葬儀に参列する場合は、会葬の 10 分前には会場に着くようにする。香典を持参し、受付で差し出す。この場合、袱紗（ふくさ）に包んで持っていき、表書きを受付係の正面に向けて出す。表書きは宗教によって異なるが、「ご霊前」が一般的である。因みに、中陰（四十九日）以降に持っていく香典は「ご仏前」である。

遺族にお悔やみの言葉をかけ、席に着き、進行係の誘導によって焼香する。出棺まで見送るが、出棺に当ってはコートを脱いで手に持つような配慮が求められる。

なお、葬式後の法要として、中陰（四十九日）、新盆、年忌法要（一周忌、三回忌、以後七と三の年）等があるが、呼ばれたら参列するようにする。